

温泉と神輿

宝永4年(1707)10月4日、東海道沖から南海道沖を震源として巨大地震が発生しました。宝永地震は歴史上南海トラフで発生した最大規模の地震と言われています。この地震の後に何が起こったのか、愛媛県松山市と高知県須崎市の例をご紹介します。

■道後温泉の湯が止まった(愛媛県松山市)

宝永地震により、道後温泉の湯が止まりました。地震後に道後の湯が止まることは過去にもありましたが、宝永地震では今までにないほどの被害が起こりましたので、温泉の不出が人心の動揺を招きつつありました。このため、時の藩主松平定直は事態が容易なことではないとして、湯神社に朱の鳥居を急造し、冠山に植樹して、山容を整え、楽を奏して三日三晩断食祈祷神事を行いました。この結果、年明けになって温泉が再び湧出したというのですが、再び湧出した期日については「翌年4月朔日より湯出る」(垂憲録拾遺)、「翌年閏正月20日霊湯再出」(本藩譜)、「翌年正月25日より湯出て同年4月より入浴す」(温泉伝記)など史料によりまちまちです。<牧野竜夫「湯祈祷記一道後温泉震災の記録一」(伊豫史談第188号、1968年)、神原健編「愛媛県気象史料」1952年など>



湯神社



道後温泉本館



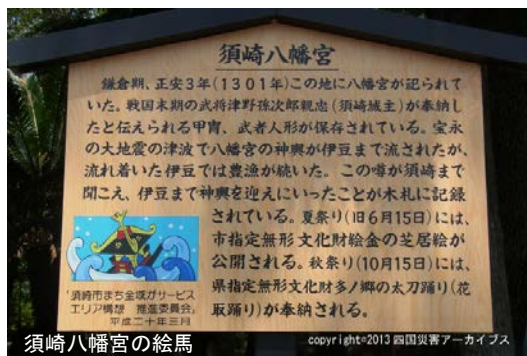
(地理院地図に加筆)

■須崎八幡宮の神輿(みこし)が流された(高知県須崎市)

宝永地震後の津波により、須崎八幡宮は社の大部分が水中に没し、倒壊しました。このため、神輿が潮の流れに乗って太平洋を漂い、流れ流れて5日目に伊豆国下田沖まで達しました。地元の人に拾い上げられた神輿は丁重に祭られていました。このことを安田浦の廻船業の長左衛門が聞き、神輿を須崎にお返し願いたいと申し入れました。交渉により村人や神官の了承を得て、長左衛門は神輿を船に積み込み、宝永5年6月に伊豆を出航し、鳥羽港(三重県)で志和浦の廻船業の弥一兵衛の船に積み替えられて、同年9月に神輿が須崎八幡宮に奉納されました。須崎八幡宮には、流出した神輿が伊豆で拾われ、返してもらったことを記す木札が残されています。<中田稔「宝永津波と八幡宮ミコシ漂流の実記」(須崎史談第14号、1974年)、大家順助編「須崎消防の歩み第2巻」1985年など>



須崎八幡宮



須崎八幡宮の絵馬



(地理院地図に加筆)